書　評

ミシェル・ペロー編　杉村和子・志賀亮一監訳

『女性史は可能か』

清　水　忠　重

編者のM・ペローは1928年生まれの女性で、パリ第七大学の歴史学教授である。専攻は社会運動・民衆文化から女性史の領域と幅広い。本書はサン＝マキシマンのシンポジウムの報告論集で、14人の研究者が執筆しており、それぞれの章の執筆者紹介は、本書の巻末にある。以下、まず各章の概要を紹介し、そのあとで評者の感想をつけくわえることとしたい。

「序文」（ミシェル・ペロー）

これまでの歴史叙述は、女性固有のできごとをそれ自体として取りあげ、叙述するということはしてこなかった。アナール学派は歴史学の研究分野をおしひろげたが、その主たる関心は経済的、社会的現象にあって、女性プロパーを問題とすることはなかった。また歴史人口学のような新しい分野を開拓した部門ですら、「世帯もちの女」だけを取りあげたのであって、独身女に目を向けることはなかった。女性史研究の困難さは、とりわけ史料にある。女性に関することがらは、第一級の価値を持つ史料には記録が出てこない。また聖職者の説教の中で語られる女性はつねにかくあるべしというあるべき女の鑑としての女性であり、フィクションとしての幻想的女性でしかない。したがって研究者は、そこにかかっているフィルターを勘定にいれて史料を扱う必要があるわけである。

「女性史のとり組みとその成果」（アルレット・ファルジュ）

現在「女性史」と呼ばれているものは1970年代に生まれたもので、研究史を1970－80年とそれ以後の時期にわけるならば、前半の時期の研究テーマは身体、性、母性、女性の生理学などをめぐるもので、「女性の自然性」に密着していた。あるいは行動的女性や反逆的女性が主として扱われ、研究者は女性で、研究主体と対象は一致していた。しかし1980年以後は男性の研究者も女性史の分野で大きな成果を挙げるなど、女性史をめぐる環境にも大きな変化が生じているといえる。

「中世学者、女性、時系列研究」（クリスティアーヌ・クラピシュ＝ズュベール）

中世の女性史には３つのフィールドがある。第１は女性を生身の人格として描くのではなく、形式主義的な法律をとおして認識し、かつ法律へと還元するもの、第２はジャンヌ＝ダルクのような例外的な女性や群を抜いた女性を取りあげて考察の対象とするもの、第３は祭礼、食事、家、家具、娯楽などの章立てのもとに女性を風俗という側面からとらえ、いわばものないし歴史的事実へと女性を還元する手法であって、いずれも一面的な扱いかたであるといわねばならない。史料を読む従来の視点にも問題がある。権力を問題とする場合、女性は軍籍への加入や官吏への任官から除外されていた以上、最初から歴史叙述から排除されていた。人口統計史学のような学問ですら、たとえば世帯を分析する場合、結局は両親（ふたおや）というカップル像をものさしとしているのであって、未亡人、未婚の女性などは最初から除外されているわけである。

「年代設定（クロノロジー）と女性史」（イヴォンヌ・クニビレール）

これまで歴史学は性別に関わりのないものとされ、男性研究者は自分が唯一、真実の歴史を書いているのだと思い込んできたが、歴史叙述の視点というものは決して中立的なものではありえない。女性に関するクロノロジーは、ま

ず女性に固有な事件を確定し、これをある時系列に並べ、そしてさらに時代区分することによってなされるのであり、こうした作業のなかから従来の政治的、経済的説明づけにとってかわる新たな歴史変革の要因も提示されるといえよう。

「女性史のための聴きとり資料」（シルヴィー・ヴァン＝ド＝カステル＝シュヴァイツァー、ダニエル・ヴォルドマン）

女性たちの歴史は私的な領分に属してきたので、書かれたものより口伝えの中に残っていることが多い。それゆえ女性たちの話したものを集める聴きとりの方法によって、女性たちの姿をよみがえらせることができる。「聴きとりによる歴史は、男性的なものによって歪められた社会のなかで、ひとつの報復手段となる」といえる。

「身体史は女性史にとって必要なまわり道か？」（カトリーヌ・フーケ）

女性は従来男を堕落させるもの、横から口出しするもの、あるいは多産か不妊かといった観点からのみ描かれ、男性が精神性の面から位置づけられてきたのに対して、女性はもっぱら身体に関連づけられて捉えられてきた。しかし出産、育児といった自然のサイクルでのみ見るかぎり、女性は身体に縛られた存在、生物学的宿命のとりこになって、たどるべき歴史はそこにはない。女性の身体史はこうした点を念頭においた上で、みなおされねばならない。

「肉体・死体・テクスト」（エリザベット・ラヴー＝ラロ、アンヌ・ロッシュ）

数世紀にわたって女性の肉体を記述してきたのは男性の想像力であり、それはいわば女性ぬきの場であった。さまざまな文学的テクストの中で男性たちが女性の肉体についてこれまでどのように語ってきたかに耳を傾けると同時に、女性自身がみずからの肉体について語り、男も含めた人間の肉体を再構築する

必要があろう。

「性差、歴史、人類学、そして古代ギリシアのポリス」（ポーリーヌ・シュミット＝パンテル）

長期的な時間の枠の中で女性の歴史を見ようとすれば、古典的な史料を活用せざるを得ない。古代ギリシアの言説はすべて男性のものであり、また歴史の研究者ももっぱら男性であったためポリスが機能する上で果たす女性の役割はこれまで等閑視されてきた。現在必要とされているのは、男性的なるものと女性的なるものとが、一連の社会的慣行の中でどのように分割されていたのかが、男性・女性両方の視点に立って研究され、図像史料の研究などを再検討することによって明らかにされることであろう。

「男性／女性――歴史叙述における性による役割分担の意味――」（ジャック・ルヴェル）

ごく最近まで歴史家たちは自分たちの研究している社会が階級、年齢層、職業、国家、民族によってのみ分割されていて、性差によって分割されていることには目をつぶってきた。したがって歴史書で取り扱われている社会的個人は男性か、中性のようなものでしかない。他方、性差に着目して研究する場合にも、性差というカテゴリーは生物学的に決定されるものだと考えるのは問題を矮小化するものである。歴史における女性の役割の研究は従来、女性の身体とその機能の研究から始められてきたのであるが、そうした態度はあたかも女性のアイデンティティを女性固有の生理学に還元するのと同様の発想でしかない。生物学的な視点ではなく、社会的な視点を優先させるべきであろう。

「『喪に服す性』と19世紀の女性史」（アラン・コルバン）

19世紀の男性には数多くの苦悩の兆候が認められるにもかかわらず、そうした兆候は隠蔽され、戦う男としてのイメージを演じるよう強制されてきた。他方、欲求不満と緊張というヒステリーのさまざまな兆候はもっぱら女性特有の

症状として受けとめられ、涙や苦悩のさけびやふさぎこみといったものは女性の独占物のように表現されるにいたった。しかし現実の男女がこうした単純な二分法で描けるはずがない。むしろ男女両者の関係を全体として分析し、女性のイメージの背後に男性の苦悩が隠されているという視点を持つべきであろう。

「嫁入り道具は、女性固有の文化か？」（アニェス・フィーヌ）

20世紀の前半にいたるまで、嫁入り道具は結婚に際しての不可欠の品物であって、これなしに女性は結婚することはできなかった。どんな貧しい娘といえど、最低限6枚のシーツを準備していなくては結婚することはできなかった。しかもこれらは父親の収入に頼るのではなく、女性がつまり母親や娘がみずから貯えたお金で買ったものでなくてはならなかった。母親は娘が7歳頃から掛売り制度などを利用して、娘の一人ひとりに生まれた順にしたがって嫁入り道具を揃えていった。また娘たちは修道院の共同作業場で長い時間をかけて刺繍の技術を学び、純潔を象徴する嫁入り用品の白地のリンネルに白糸で刺繍を施した。豪勢な嫁入り道具を首尾よく準備してもらえるかどうかは、娘たちの両親の社会的地位や姉妹間での位置関係、両親からの愛情の多寡如何にかかっていたわけで、娘たちはその準備に全エネルギーを注いだのであった。

「フェミニズムの特異性　フランスにおけるフェミニズムの歴史——その批判的検討——」（ジュヌヴィエーヴ・フレス）

女性史とは女性のおかれた条件の分析であるが、フェミニズムの歴史とは、それを変えようとするものの分析である。フェミニズムの歴史は女性をめぐる条件を検討することであると同時に、社会秩序の変革を検討することでもあるといえる。フェミニズムが長いあいだ歴史から忘却されてきた原因の一つは、フェミニストがいわば「普通の女とはいいがたい女性たち」、つまり普通でも例外的でもなく、どこにも分類できない類の女性であって、その人物像を表現しにくい点にあるといえよう。フェミニズムの歴史の研究者はほとんどの場合女

性であるから、研究主体はつねに研究対象との間に距離をおくよう心がける必要がある。

「女性、権力、歴史」（ミシェル・ペロー）

19世紀には医学や生物学に依拠して男性は知性、理性、決断力といった面で、また女性は心、情緒などの面で優れた資質を持っているという理論が隆盛をほこり、女性の政治からの排除を正当化するものとなった。ミシュレは政治権力は男たちの占有物であって、女性が政治に口出しするとき腐敗、混乱、衰退が生じると考えていたし、フィヒテ、ヘーゲル、コントなども女性の行動を私的な、家庭内の母親としての「天職」の範囲内に押し込めるべきであると考えていた。こうした考え方はフランスではごく最近まで根づいていたといえる。

以上が各章の大まかな概略だが、それぞれの章に第1章何々、第2章何々と序数が打たれていないことからも分かるように、章と章の間にはほとんど論理的なつながりや論旨の発展というものがなく、それぞれの研究者が自分の問題関心を単発的に論じているだけで、バラバラな論文の寄せ集めという感じがしないでもない。つまりどの論文も特殊専門的なうえ、相互の構成的なつながりがないので、この点やや分かりにくい。基礎論がまず述べられ、その後順をおって各論が体系的に展開されていくといった既成の学問の整序された叙述を期待してはならないわけで、その意味でもこれは緒についた学問の中間報告という感じのものである。

一読して思うのは、歴史の読みものとして文句なしに面白かった「嫁入り道具は女性固有の文化か？」（アニェス・フィーヌ）は別として、どの論文も論述が実証性に乏しく、抽象的な理論や方法論を前面に出しすぎているという感じがすることである。「肉体・死体・テクスト」はとくにこの感じが強く、素人にははっきりいって難解である。女性史と同様、歴史家がこれまで等閑視してきた研究分野に子供の領域というのがあって、この分野ではいうまでもなく例のアリエスの『子供の誕生』が古典的な名著として有名である。評者はいつだっ

たかこのアリエスの本を読んだ際、その回りくどいもたもたした叙述に大いに辟易したことがあるが、しかしアリエスの叙述にはおそるべき実証性があって、身のまわりの物に対する彼の骨董屋的な飽くなき探究心はどう考えてみても常人の真似の出来るしろものではないと実感させられた記憶がある。この女性史の本にはそういう意味での実証性が欠如していて、なにか観念的な理論に終始しているという印象が強い。

この本書の執筆者グループの場合、実践的意図が強いせいか、過去がどうであったかという古くさいことよりも、むしろ実践的・理論的関心のほうがどうしても旺盛になってしまうのかも知れないが、しかし方法や理論というものは研究の上でのたんなる方便にすぎないのであって、それ自体として価値があるわけではなく、あくまで対象に適用されどれだけ実質的な成果をあげうるかを結果的に示しえてはじめてその意義も評価されるというべきであろう。本書のように内輪の研究者にのみ通用するような観念的方法論をストレートに提示するのではなく、もっと白紙の状態の素人をも納得させるような成果のほうで叙述してほしいという気がするし、もうすこし事実レヴェルで興味をそそられるような叙述は出来ないものかという気がしないでもない。いずれにしても本書はこれから女性史に関心を持とう、あるいは持ってみたいとする者のために書かれた啓蒙書ではなく、この方面で研鑽をつんだ専門の研究者向けのものとみるべきであって、門外漢にはあまりお勧めできない。「訳者あとがき」を読んでみて、本書を翻訳した動機の必然性はもう一つよく分からないが、訳は読みやすいこなれたものになっているように思う。

（藤原書店、1992年5月、本文435頁、3,800円）